# 能登半島地震と 文化財レスキュー

最大震度7の地震が起こった。この能登半島地震では、 地震による地殻変動、液状化現象、土砂災害、津波などに より、建物の倒壊やライフライン・インフラ等の甚大な被 害が、能登地方を中心に北信越地方と岐阜県に発生した。 7月現在で200名以上の尊い命が奪われ、石川県を中心 に12万棟以上の住宅に損壊等の被害を出している。懸命 な復旧・復興作業が行なわれているものの、いまだ現地の 人々は不自由な暮らしを余儀なくされている。

# 文化財レスキュー活動

能登半島地震の文化財レスキュー活動は、広報によると1月25日に石川県が文化庁に救援要請を行な い、2月13日に事業が開始された。4月、国立文化財機構文化財防災センターから日本博物館協会を通し て派遣募集があり、発生からおよそ4か月後の5月7日から4日間、私は文化財レスキュー隊員として能登 地方へ赴いた。発災から4か月後の派遣ではあったが、現地では地震の爪痕が色濃く残っていた。

私が派遣されたとき、およそ140件のレスキュー要請が来ていた。救出は、文化財指定の有無は関係な く、社寺や個人からの要請に選別なく応じているということだった。派遣期間中のおもな活動は、調査と救 出の2つであった。調査は、救出のため事前に対象資料の所在確認、被災状況の把握、救出方法等の検討な どを行なった。救出は、対象資料の梱包、搬出、仮保管場所への収蔵などを行なった。4日間の活動では、

9名のレスキュー隊員と、時に石川県立歴史 博物館の学芸員らとの共同作業をしながら、 社寺と個人宅を対象に3件の調査と3件の救 出を実施した。

活動中、被災者である地元の方々の援助を 受けることがたびたびあった。全壊した無住 の寺での調査活動では、近隣の方が仏像の安 置場所を証言してくれたおかげで、どこに対 象資料があるか見当をつけることができた。 ある半壊した神社では、事前に建物から運び 出すことのできた狛犬などを、近くの避難所 が保管していた。また、ある無住の寺では、 隣家の方が自身も避難所生活をしていなが ら、寺に保管されている特に重要だと思われ る資料を、施錠が不十分で盗難の危険がある と判断して、自宅で保管していた。文化財レ スキュー活動には、地元の方々の協力が不可 欠であることを改めて実感した。

(←次ページへ) 写真 救出した仏像



令和6年1月1日16時10分ごろ、石川県能登地方で



写真2 がらんどうの収蔵庫



写真3 船形木棺の搬出



写真4 梵鐘の輸送

# 2024.10.1 238

年2回(10月、4月)発行 編集・発行/名古屋市博物館 〒 467-0806 TEL 052-853-2655 FAX 052-853-3636 https://www.museum.city.nagoya.jp 古紙を含む再生紙使用

# 瑞穂遺跡から出土した 青銅器鋳造関連遺物

―東海地方2例目となる弥生時代の送風管の発見―







名古屋市博物館だより 238 号 令和6年(2024) 10月1日

名古屋市瑞穂区瑞穂通 1-27-1

写真1 子どもたちからの色紙

# 瑞穂遺跡から出土した青銅器鋳造関連遺物

―東海地方2例目となる弥生時代の送風管の発見―

当館が所蔵する瑞穂遺跡(名古屋市瑞穂区)出土資料の中に、青銅器の鋳造に使われた弥生時代の送風管を確認した。 送風管とは、炉で青銅(銅・錫・鉛の合金)を溶かす際に、送風器具の鞴で発生させた風を炉内へ送るための土製の管で ある。東海地方において、弥生時代の送風管は、見晴台遺跡(名古屋市南区)のもの(深谷・佐々木 2008)に次いで2例 目の確認となる。弥生時代の尾張の青銅器生産を物語る重要資料であることから、今回速報として紹介する。

# 瑞穂遺跡について(図1)

名古屋市の中央部を構成する熱田台地の一部の瑞穂台地 に位置する。弥生時代中期後半から後期の集落遺跡である。

中期後葉(紀元前1世紀)に集落が営まれたのち、後期前 半の後葉(紀元2世紀前半)に大規模な環濠が掘削されると ともに、多くの竪穴建物が営まれ、環濠集落が成立する。 後期前半の終わりごろから後期後半の初めごろ(2世紀中 ごろ)には多数の竪穴建物が存在し、地域の中心的な集落 として栄えるが、後期後半の前葉ごろ(2世紀後半)には環 濠が埋まり、集落の規模は急激に縮小する。

瑞穂遺跡で環濠集落が形成される時期には、あゆち潟 (名古屋市域南東部にかつてあった入り海)沿いに、瑞穂遺 跡に加え、見晴台遺跡、三王山遺跡(名古屋市緑区)など複 数の環濠集落が出現する。それら環濠集落の出現には、広 域にわたる何らかの争いにともない、地域の緊張状態が高 まったことが背景にあったとされている。

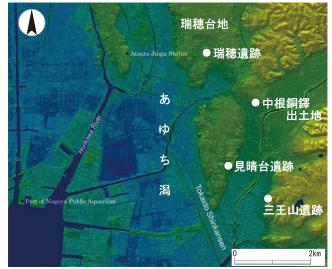


図1 瑞穂遺跡と関係遺跡の位置 ※国土地理院ウェブサイトのデジタル標高地形図(名古屋)を用いて作成

# 本資料の来歴

瑞穂遺跡は、昭和6年(1931)に始まった道路建設工事 にともない、土器・石器など多くの遺物を含む土層が確認 され、遺跡の存在が広く知られるようになった。

本資料は、樋口敬治氏が昭和6年から10年の間に瑞穂 遺跡で採集し、所蔵していた遺物を考古学者・吉田富夫氏 が異なる時期に複数回入手し、のちに一括して当館に寄贈 されたものに含まれる。本資料の具体的な出土地点、採集 年月日は不明であるが、吉田氏が同じ時に入手した他の遺 物で、出土地点がわかるものはすべて遺跡範囲北西部の旧 「瑞穂町字西牧」であることから、本資料も同地点で採集さ れた可能性がある。

### 送風管の観察(図2・3)

端部は残っていない。実測図を示したものとは別に、 同じ送風管の一部で、接合しない破片がある。残存長 16.7cm、外径 5.2 ~ 5.25cm、孔径 2.6 ~ 2.7cm、厚さ 0.8 ~ 1.55cm、重量 348.9 g である。外面には、送風管の前 後方向に帯状にのびる黒斑が1か所認められる。鋳造作 業時の被熱の痕跡は確認できない。外面の色調は橙色で、 黒斑に近い部分は浅黄色、内面の色調は浅黄色である。胎 土はやや粗い。

外面の調整ははっきりとしないが、ナデ調整を主とする と思われ、一部にハケメが確認できる。内面には、送風管 の前後方向にのびる「しわ」の跡がある。この「しわ」は、送 風管を成形する過程で、断面円形の心棒に粘土板を巻き付 けた際にできたものと推測する。

近畿地方の代表的な青銅器生産遺跡である唐古・鍵遺跡 (奈良県田原本町)、東奈良遺跡(大阪府茨木市)では多数の 送風管が出土しており、先端がL字状に曲がる曲状送風管 と、先端が曲がらない直状送風管が確認されている。唐 古・鍵遺跡の送風管の長さは50cmほどと推定されてお り、端部が残っておらず、残存長が 20cm に満たない本資 料は、曲状送風管、直状送風管のいずれであったのかは判 断できない。東奈良遺跡の送風管の孔径は 2.5cm 前後に 事例数のピークがあり(清水2019)、本資料の孔径は近い 値を示す。



図2 瑞穂遺跡出土の送風管

## 送風管の出土からいえること

瑞穂遺跡では、武器である青銅製の鏃(銅鏃)が多数出土 しており(図4)、その数は20点を超える。なかには、伊 勢湾周辺で数多く出土する多孔銅鏃(装飾的な意味合いで、 4個以上の孔が開けられたもの)が3点含まれる。濃尾平 野の弥生集落では、40点近くが出土している朝日遺跡(愛 知県清須市・名古屋市)、29点が出土している荒尾南遺跡 (岐阜県大垣市)に次ぐ点数となる。瑞穂遺跡の銅鏃は、出 土状況から具体的な帰属時期がわかるものはないが、東海 地方において銅鏃は弥生時代後期に生産され、流通したこ とから、多くは後期の環濠集落が営まれていた時期のもの と考えられる。

今回確認した送風管の存在、多数の銅鏃の出土、そして 銅鐸は尾張・三河・遠江での生産が推定されてきた(進藤 銅鏃が多量に出土している朝日遺跡、荒尾南遺跡では銅鏃 が生産されていた可能性が高いと指摘されていること(岩 本 2020)を踏まえると、瑞穂遺跡において、後期の環濠集 落の時期に銅鏃の生産が行われていたと推測される。した がって、送風管は環濠集落の時期のものと推定する。

伊勢湾周辺に特徴的な遺物である多孔銅鏃について、熱



図4 瑞穂遺跡出土の銅鏃(名古屋市教育委員会・名古屋 市博物館所蔵、写真は名古屋市市政資料館提供)

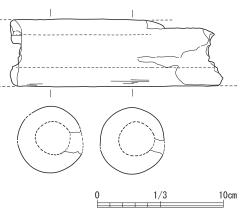


図3 瑞穂遺跡出土の送風管実測図

田台地が分布の中心であること、熱田台地出土のものは、 多孔銅鏃の存続期間の中でも古い時期に帰属する可能性が 高いことが述べられている(村木2008)。瑞穂遺跡では多 孔銅鏃が熱田台地で唯一複数点出土しており、さらに今回 同遺跡における銅鏃の生産が推定されるようになったこと から、多孔銅鏃は瑞穂遺跡で製作が始まった可能性が考え

ところで、弥生時代を代表する青銅器に銅鐸があるが、 瑞穂遺跡から南東へ約2km離れた地点で銅鐸(旧中根村 で出土したことから中根銅鐸と呼ばれる)がみつかってい ることは注目される。中根銅鐸は、三河・遠江を中心に みられる三遠式銅鐸と呼ばれる一群に含まれる。三遠式 2002)。中根銅鐸は三遠式銅鐸の中でも最後の段階のもの で、連続する渦巻文を多用する、類例が少ない特徴的な文 様をもつ。中根銅鐸の推定製作時期と、瑞穂遺跡の環濠集 落の時期=推定銅鏃生産時期は重なり、送風管が出土して いる瑞穂遺跡や見晴台遺跡の熱田台地の集落で、中根銅鐸 など一部の三遠式銅鐸が生産されたことも想像できよう。

今回、瑞穂遺跡の送風管の確認により、弥生時代後期の 尾張において、朝日遺跡、見晴台遺跡、さらに瑞穂遺跡 と、複数の集落で青銅器の生産が行われ、地域に青銅器生 産が定着していたと推定できるようになったことは大きな 成果である。

岩本崇 2020「荒尾南遺跡の青銅器と古墳出現期前後の青銅器生産」『荒尾南 遺跡を読み解く~集落・墓・生業~』第34回考古学研究会東海例会

清水邦彦 2019「東奈良遺跡出土小型送風管の用途について―ガラス製品用 の可能性―|『茨木市立文化財資料館館報』第4号

進藤武 2002「近畿式銅鐸と三遠式銅鐸」『銅鐸から描く弥生時代』学生社

深谷淳・佐々木稔 2008「名古屋台地上の弥生集落より出土した鋳造・鉄関 連遺物―見晴台遺跡の送風管と高蔵遺跡の鉄関連遺物―」『名古屋市見晴 台考古資料館研究紀要 | 第 10 号

村木誠 2008「伊勢湾地方の地域的特質—弥生時代後期における東西日本間 の関係を中心に—」『日本考古学』第26号 日本考古学協会

### 被災者の動向と文化財レスキュー

1月1日のそのとき、私は帰省していて能登町の実家にいた。能登町では震度6強~6弱が観測され、私 は名古屋へ戻ることができなくなり、そのまま 20 日あまり避難所暮らしをすることになった。避難所にい るあいだ、暮らしの様子や日々増えていく支援活動など、状況の変化を追う必要性から記録を取ることにし た。こうした記録は、文化財レスキュー活動にも役立つのではないだろうか。特に能登半島地震では個人か らの要請も多く、被災者の要請が文化財レスキューの出発点となっている場合が多いようである。今後の検 証の一端になればと、記録の一部を挙げておく。

### 表 能登町のある避難所周辺の状況

1月1日	地震発生。停電・断水。携帯電話不通。避難所開設。
1月3日	支援物資届き始める。給水支援開始。
1月4日	夕方、発電機(支援)を利用して、避難所に電気がつく。
1月5日	携帯電話復旧。ガソリンスタンドが緊急車以外も使用可能となる。
1月7日	停電復旧。
1月9日	仕事に出勤する人が増え始める。入浴支援開始。
1月12日	2次避難のお知らせ。このころ町内の小売店が一部営業再開。
1月13日	燃やせるごみの収集が始まる。当面は毎日収集。
1月14日	被災建築物応急危険度判定が避難所周辺の集落で実施。
1月16日	「地域の貴重な『たからもの』を捨てないで」呼びかけ 第1報
2月1日	『広報のと』臨時号2号「『たからもの』を捨てないで」呼びかけ
2月5日	災害ごみ、仮置き場に搬入開始
2月8日	能登町での災害ボランティアが受入開始

1月16日能登町のウェブサイト上で「地域の貴重な『たからもの』を捨てないで」という呼びかけが行なわ れた注)。そのころの被災者は、支援を得てようやく生活が成り立つような状態であった。ただ一方で避難 所にいる多くの被災者が、家に帰って片付ける活動を1月2日から始めていた。また、可燃ごみの収集が再 開されると、例外的に連日行なわれ、多くのごみが出されていた。こうした一連の動向から、被災者に対し て、心情に寄り添いながらも、家に残る歴史資料などを捨てずに残しておく呼びかけを迅速に伝えることが 必要であることを再認識した。

地元に残る貴重な資料を大災害から守るためには、文化財レスキューの迅速な活動と、地元に住む方々の 協力が必要である。今回のレスキュー活動中、過酷な状況にありながら親切に対応していただいた地元の 方々に感謝するとともに、今後の文化財レスキュー活動によって、数多くの貴重な資料が救出されることを 切に願う。

注) 能登町教育委員会事務局文化財係『能登町文化財レスキュー News』第0号 能登町教育委員会事務局文化財係 令和6年4月